

福清会の小史は概略三期に分けることが出来る。その末めには当然の事乍ら大学の発展拡大によって影響を受けるのは当然の帰結である。

1. 黎明期 昭和30年(1955) ~ 昭和51年(1976年)

この時期は福清会の原動力となる活動が行われた。それと可能にしたのは何と云っても八美里小屋の建設に始まる。

当時の埼玉大学は文理学部と教育学部の2学部のみで私達は理学科化学教室に所属した。他に数学教室、物理学教室、地学教室があり化学教室を含め5つの教室に分れていた。化学教室は更に理論化学(後に物理化学と名前変更)、有機化学、無機化学があり福田先生は物理化学を担当されていた。

福田先生は前にも触れた通り純粋な学術、学問の他にアルコールグループやケミカル誌の指導もされており当時の化学教室の同窓会は「ケミカルの会」と呼ばれこの名稱は福清会と同義語の様に現在でも使われている。

先生が八ヶ岳の南東の山荘に自己資金を投じかねてから計画されていた初代の山荘八美里小屋を建設されたのは昭和57年9月頃で建設に当っては山岳部の猛者と11期12期の福田研門下生が休日に労力を提供した。

この時代はまだ福清会の名は存在せず小規模な送別会や歓迎会はケミカルの会の名稱で断片的であった。

八美里小屋は連帯の絆を強めるエポックであった。

この時代の後半は埼玉大学の発展が著しく文理学部は改組の上理工学部の理学系となる研究活動も広がり研究室の装備も一新された。

2 維持展開期 昭和52年(1977年)~平成4年(1992年)

前年度の大学の発展に続きこの時代は更に最終的総合大学を目指しての埼玉大学の発展が続いた。

これまで文教学部 経済学部 教育学部 理工学部から理工学部は更に理学部と工学部に分れた。

理学部の中には柴崎先生や中原先生が福清会事務局を設けてくれた。福田先生は理学部長という要職の中で大学院の創設、世界的な研究シンポジウムの主催等御多忙の最中であられた。

一方で昭和30年代及至昭和40年代に卒業(殆んどは文理学部)の門下生も企業、役所、学校を問わず社会的に重要なポジションで活躍中であり遠方に転勤したり海外で活躍し経済大国日本を支える世代として仕事に追いまわられている毎日であった。

かかる理由からケミカーの会の活動は停滞を余儀なくされたがそんな折に福清会名簿が発行され坪谷氏の「努力で」文理時代の教職員の方々ケミカーのメンバー(文理7回~12回卒)の懇親会が行われることになった。この懇親会は昭和50年代から平成の初頭にかけて合計で5回も回忘年会か納涼会の形で行われた。多忙に追はれる日常を忘れ先生方門下生がいつもまとまって楽しいひとときを過ごすことが出来る嬉しい宴であった。これらの記念会が散逸していったのが残念である。

この忘年会から生まれたケミカーの会(殆んどが福清会に属す)が今尚残されているいろいろな活動の原動力になっている。

尚福田先生は平成4年(1992年)に埼玉大学を退官された。

○ 埼玉大学

3. 活動期 平成5年(1993年)～

福田先生は退官されたあとも全口の大塚から講師としてお招きし学究面での仕事を続けられ自ら自然文化芸術を愛する旅をされ人生の奥義を極めようとした。

一方で埼玉大学の文理学部の多くの門下生やその後の理工学部 理学部に籍を置いた門下生の一部の人々も社会でそれなりの地位を得たり或は定年まで至り自適の生活に入る方も現れ先生や友人と接触する機会が増した。

先生がお会いする度に語りかける人生の奥義に感謝し立派な師はいつになっても立派な掛け替えない師であるとの理念に基づいてケミカ-の会(福清会)は活動を続けた。

門下生による恩師の人生訓を後世に残すお手伝いをするのがこの期のテーマとなった。